

## 「自分の力で見る」こと

ルーマー・ゴッデン作 石井桃子訳 『ねずみ女房』（福音館）

森下 みさ子

見知らぬ真新しい世界を、何の構えももたず、自分の力で、見ることは、実はとてもむずかしい。意図的にも無意図的にも、わたしたちはものの見方を教わり、とらえ方を習って育ってきてしまう。少し哀しいいい方をすれば「育つ」とは、知らず知らずのうちに、人々と共有しうる特定の視線を自分ももつようになることでさえある。何かを生まれて初めて「見た」子どもの目にささるような刺激、

身体のすみずみまでしみわたる不思議、心の芯をふるわせる得体の知れない力など、だんだんと忘れ去られるに伴って、他のみんなと同じようにものごとを知り、わかり、そうしてよく見知った安定した世界に落ち着くようになる。そうなってしまうえば、それ以外の世界を見ようとするやっかいな衝動に突き動かされないかぎり、普通に楽しくくらし、ゆるくすることもできる。けれど……。

ここに一人ならぬ一匹のねずみの奥さんがいた。めすねずみは極普通のねずみらしい姿かたちのねずみだったし、未来の赤ん坊たちのための巣づくりや、だんなさんと自分の食べ物がしにかまけてくらしでゆけば、それでもよかった。けれど、めすねずみはわけもなく、「○○したい」というはつきりした要求もなく、ただほんやりと今もっていない「何かがほしかった」。だから、はとがとらえられ金色のカゴにいれられて、めすねずみとことばが交わせるほど身边にやってきたのは、めすねずみにとって一生に一度あるかなにかの幸せな機会だったのである。それはあくまで偶然の機会なのだけれど、人を導く偉大な「偶然」は、こうして何かしら求めている心の前にこそ投げかけられるような気がする。

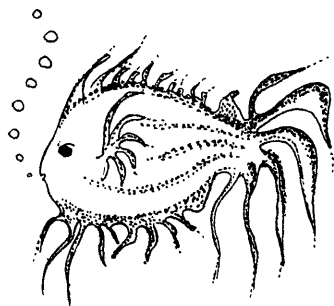
めすねずみは、囚われの身となったはとの

話に耳を傾ける。朝早く草や葉の上で光っている「つゆ」のこと、麦の上に波を描きながら吹く風のこと、家の屋根や木の梢や丸い形の丘や平らな畑地や遠くの山のこと……聴いているうちにめすねずみは「まるでしっぽの先で立って、きりきりまいでもしたように、目がまわってくる」。はとがカゴの中にながらありありと思いつくようには、めすねずみはこれらのものを目に浮かべることができない。けれど、めすねずみには感じる事ができる。はとが大空を自在に飛んでいたころの、あの視界の広がり、大気のみずみずしさ、そして自由であることの生命のふるえ……。はとは「飛ぶ」ということさえ知らないこの小さな友だちに思いつくことを話すことで、かろうじて生命のみの飛翔を続け、めすねずみはその飛翔の夢に「ほしかった何か」の気配を感じて、心はずませる。はとが夢

見るようにして話してくれるものが何を指すのか、それが二人に共有されているかどうかは問題ではない。それらがめすねずみが心ひそかに求めていた見知らぬ世界の「何か」であること、その限らない広がりともくもく輝き、突きぬける力が、家の隅にあっても二つの生命を結びつけ、外の世界へ向けて開いていることが大事なのだ。だから、めすねずみには全く異なる生を享受してきたほどの哀しみがわかる。

めすねずみは、小さな歯に渾身の力をこめてカゴのとめ金をはずし、弱りきったはとを逃がす。外へと向けられたはとの目には、小さな救い主の姿は映りさえしない。はとは翼を広げ、窓の外へ、木々の高みへ、飛んでいってしまう。「ああ、あれが飛ぶということなんだわ。」「これでわかった。」……めすねずみが初めて「飛ぶ」ということの真の姿を

目のあたりにしたとき、同時にそれが見知らぬ世界との別れでもあることに気づかされる。「もうだれも、丘のことや、麦畑のことや、雲のことを話してくれるものはなくなつた。わたしは、そういうものを忘れてしまつたろう。もうだれも話してくれないし、おまけに、子どもたちは、あんなにたくさんいるし、パンくずや、巢につめる毛ほのことも考えなくちゃならないというのに、どうしておぼえていられるだろう。」……めすねずみは、外の世界と直かには結びついていない。はとがいたから、はとが話してくれたから、めすねずみはその飛翔の夢の翼にのって、外の世界を感じ、めまうような一時を呼吸したにすぎないのだ。それに比べて日常のくらは、あまりにもありありと、そして長々と横たわっている。それらを忘れて夢の話に生きるほど、めすねずみは強くない。だんなさん



やたくさんの赤ん坊を放って、日がな一日外の世界へ目を向けているには、めすねずみはやさしすぎる。だから、外の世界の輝きも広がりも、日常の向うへ遠ざかり、いつしか消えてしまうにちがいない。

そのとき、である。めすねずみの目に星がとびこんでくるのは……。もちろんそれは「星」ということばでは置きかえられない。星のことはだれも、あのはとでさえ教えては

くれなかつたのだから……。けれど、めすねずみはそれが「何か遠い大きいふしぎなもの」であることに、自分で気がつく。そして、誇らし気ないう。「でも、わたしに見えないほど遠くはない。……わたしには、それほどふしぎなものじゃない。だって、わたし、見たんだもの。はとに話してもらわなくても、わたし、自分で見たんだもの。わたし、自分の力で見ることができるとわ。」

このとき、はるかな宇宙の輝きとアワツぶのような涙をぬぐっためすねずみの小さな目が、どれほど確かな線で結ばれたことか：  
：。自分の力で「見る」ことの澄明さ、外なる世界を裸のまま「知る」ことのきらめき：  
：。「星」という名前も、その説明もいらない。めすねずみは、自分の力で見ること、どんなに遠くても大きくても不思議でも、新しい世界と自分を直接出会わせることこの上ない喜びを知ったのである。

このお話は、ねずみのしっぽのように短くてたわいない。主人公も遊びを食べて生きていくような生命力にあふれた子どもではなく、だんなさんや赤ん坊の世話に忙しく狭い家を走りまわっているねずみの奥さんである。それに、めすねずみのしたことといったら、カゴのとめ金をはずしてはとを逃がした

だけのことだ。きらびやかな光と奔放な風に恵まれた夏という季節には、もっと熱っぽい冒険の方が似合っているかもしれない。けれど、何百、何千という夏の光を束ねたよりもまばゆく、それでいながら夏の星のまたたきのようにやさしく、この小さなお話はわたしをとらえてはなさない。それはきっと、このお話が未知のものとの夏の出会い、自分の力で外の世界を感じる夏の「冒険」の輝きを秘めもっているからにちがいない。

(お茶の水女子大)